

静かな空を 沖繩に

那覇市立安岡中学校一年 柴田 勝

ドゥーン ドドドドド。

どう音が近づいてくる。まるで空を切りさくナイフのようだ。耳慣れない音に驚いて窓を開けた。音は、さらに大きくなり体にひびいてくる。軍用機が視界いっぱいには飛び込んできた。すぐに見えなくなったけれど大きな音はしばらく続いていた。こんな時間でも近所の人は慣れているのか。空を見上げているのは僕達家族だけだった。

僕は東京都から引越して来た。沖繩に来て、まず感じたことは「何てすてきな島なのだろう」ということだ。青くすき通った海、潮のいい香り、美しい伝統のある赤がわらにシーサー。沖繩にある、どれもが光っているように見えた。しかし、その光は、軍用機の音に、かき消された。

ゴォーゴォー。これまでだったら、めずらしく思って、すぐに反応するが「またか」という感じ。一ヶ月で聞き慣れてしまっていることに複雑な気持ちになる。今日の軍用機は、やけに低空飛行だ。見たことのない機体の下の部分がくっきりと見えた。そのとたん、そこから穴が開いて、爆弾が落ちてくるのではないかと、急に不安になった。今まで感じたことのない恐怖に体が固まった。戦争の怖さを、はつきりと感じた瞬間だった。

かつての戦争を想像してみた。住民たちが逃げている。飛びかう悲鳴、絶え間なく続く銃声と爆発音。そんな鉄の雨の中を逃げまどう人達の気持ちを考えて時、涙が出てきた。とても怖かったし、つらかっただろう。

かつての悲劇と形は変わっているが、実は、沖繩には、まだ戦争の悲劇が残っている。調べてみると、島の面積は日本全体の〇・六パーセントトしかない。それなのに、日本にある米軍基地の、何と七〇パーセント以上が、ここ沖繩にある。それに比べて東京は全基地のうち五パーセントト程度。沖繩と東京の面積は、あまり変わらないから、この島は東京の十四倍の米軍基地を抱えていることになる。軍用機が飛ぶ回数も東京よりも十四倍近く多くなる計算かもしれない。それは、周りへの大きな危険性も高いということだ。驚きの事実を知り、これまで戦争とは過去の

ものだと思い、知ろうとしていなかった自分がずかしくなった。

戦後七十六年にもなる。こんな昔なことから、戦争はすでに終わっているものだと思っていた。実際、僕の周りには戦争を感じさせない環境がなかった。前に住んでいた西多摩群は東京の中でも自然が多く、空は静かだった。だから一山向こうの花火や雷の音にも気づけた。飛行機が飛ぶことは、たまにしかなく見つけると自慢していた。

一方、沖繩の空は、軍用機に支配されている。朝の六時にも夜中の一時にも、いつも、いつも大きなエンジン音。その間、会話ができないし、心が落ち着かなくなる。この違いを、僕の東京の友達には知らないだろう。空が静かであることが当たり前ではなかったということ。同じ国なのに、こんなに違いがあるのか。

同じ国の中で違いがあってはいけない。戦争の悲劇を沖繩に背負わせてはいけない。沖繩の人にだって穏やかに暮らす権利がある。つい落の不安やその音に悩まさない権利があるのだ。

昨年からコロナウイルスが大流行していて、僕の日常は大きくゆさぶられている。当たり前だったことが禁止されたり制限されて、しんどくなることもしばしば。特にしんどかったのは、休校になり学校に半年も通えなかったことだ。なくなって初めて、当たり前にあったものの大きさに気づかされる経験をした。あの時と同じ気持ちがする。当たり前前にあっただけの静かな空が恋しくてたまらない。

だから、僕は考える。一分でも一秒でも長く、静かさを取り戻す方法を。軍用機がなくても成立する平和を。そのために、まずは、もっと沖繩戦のことを学ぼうと思う。その上で、軍用機は必要なのかを、住民の声や、実際に音量を測定したデータをもとに考えていきたい。

また、僕と同じ想いの仲間を探していく。僕以上の力で、この島の人々を、本当に守りたいから。同じように引越して来て、軍用機に戸惑っている人がいるかもしれない。事実を知れば、力になってくれる東京の友達がいるかもしれない。そのような仲間と協力して声を上げていきたい。

静かな空を沖繩に。これは平穏な空のもと暮らしてこれた僕の使命だ。近い未来、夜間の飛行がなくなっている。昼の飛行も今の四分の一に減っている。そして、僕の一才の妹や今の沖繩の友達が、飛行機といえば、軍用機でなく旅客機を思いうかべる。そんな日常が来るまで決して、あきらめない。